

## 古川典子（平成三十年二月号）

余命とふ時間をうめて聴講す今野寿美氏の涼やかな声

身の内に播種とふ仕事なす者のありて数多の発芽うながす

わが病告げれば直ぐに涙ぐみ慰めやうのなき馬場昭徳氏

もう好きな物しか食べぬ夕食は無花果を剥き葡萄を洗ふ

出来心のやうにふらりと入りたり美容室の名確かめもせず

癖があると美容師の言ふ髪のことなれど心が先に諾ふ

見送りの店主「次回はご予約を」いえ次回などもう無いのです



### ●作者の言葉

この度の晋樹隆彦先生の年間選者賞をいただき、ありがとうございます。

自らの余命を知るとい

は、不思議な体験だ。告げら

れたのは昨年十月。病名は原発不明ガン。早ければ年末には諸症状があらわれ、三月頃

までには……とのこと。死そ

のものより、職場、家庭の片づけ、整理、引継ぎの多さに呆然とした。

それでも凡のことが片づく、私の時間はぼんやりと死を待つまでのこととなってしまった。虚しい。

そうだ！ 死を待つ時間ではなく、歌集が出来るのを待つまでの時間にしよう！

三月下旬から怒涛の作業となった。こうして第三歌集『鳥の時間』の出版に到る。感謝。

### ●選者の言葉

重い病をかかえ、覚悟を決めている作者だと分る。「余命とふ時間をうめて」のなんと切なく自然な表現であろう。

絶望的な生の終末を告げられた作者ではあるが、ありのままの日常を銜わず焦らずたんたんとして一首一首に収めている。

「慰めやうのなき」は、作者が慰めているので、余計に読者の心に沁みこくる。

迫りくる非日常の時間の中で、ふらりと美容室を訪れるのは女性ならではの感覚であろう。地味ではあるが、初期より表現力の確かな作者と感心していた。